



K230.83

15

2

三松堂編輯所編纂

應用女子作文書

東京 松邑三松堂

應用女子作文書 卷二目次

第一學期

第一課 語句の斷續 一

練習 四

宿題 記事文 六

第二課 復文 七

報知文

第三課 書取 一一

漢字

宿題 書翰文 一四

見舞文

233-461

三松堂編輯所編纂

應用女子作文書

東京 松邑三松堂

應用女子作文書 卷二 目次

第一學期	
第一課 語句の練習	一
宿題 記事文	六
第二課 復文	七
第三課 書取	二
宿題 漢字	
宿題 書翰文	
見舞文	一四

應用女子作文書卷二 目次

44. 2. 4
内交

第四課	叙事文の要領	一六
第五課	叙事文	二三
宿題	叙事文	二六
第六課	書取	二八
	漢字	
第七課	復文	三三
第二學期		
第一課	用語用字の正當	三八
	練習	四〇
第二課	記事文	四二
宿題	記事文	四七
第三課	送假名法	五一

第四課	復文	五六
宿題	書翰文	六〇
	贈遺文	
第五課	書取	六三
	假名	
第六課	日記文	六六
	文例	六八
宿題	日記文	七六
第七課	記事文	七七
第八課	書取	八二
	漢字	
第三學期		

卷二目次終

第一課	用語の一致	八六
	練習	八九
宿題	敘事文	九二
第二課	書取	九六
	漢字	
第三課	復文	一〇〇
宿題	書翰文	一〇三
第四課	敬語	一〇六
	練習	一〇八
第五課	書翰文	一一一
	誘引文	

應用女子作文書卷二

第一學期

第一課 語句の斷續

多くの事實集りて一の思想となり、種々の思想集りて一の文となるものなれば、其の文中の語句は、決して一続きとなることなく、必ず斷續すべきものなり。
さて、語句は大抵一事實にて斷るべきが如くなれど、口調を整へ、文意を明にせんには、餘り長きにわたる事實は、中途にて斷ることもあるべく、又、短き事實の多く連りたる時は、こ

二
れを續くる場合もあるべし。是れすなはち習熟を要する處なり。而して其の斷續を適當にせんには、よく語句の組合せを考へ、これに相當せる語法を用ふること必要なり。若、其の語法にして誤りたらんには、既に斷續も正しからざるものなり。

奈良より南大和へ赴く。汽車にて畝傍に到る。一宿して翌朝神武天皇の御陵を拜す。徒歩にて吉野山にたづね入る。吉水院、吉野神社などに参りて實に懷古の情にたへず。

此の文を見よ。かく語句のされぐなるは、恰も臺所の買物帳を読むが如き心地せられ、文としては實に價值なきものなり。さればとて、

奈良より南大和へ赴くとて、汽車にて畝傍に到り、一宿したれば、翌朝神武天皇の御陵を拜して、徒歩にて吉野山にたづね入りて、吉水院、吉野神社などに参れば、實に懷古の情にたへず。

の如きは、全體一續きの文となりたる上、語法さへ正しからざれば、記述の趣旨明ならず、只長く語句を連ねたるを知るのみ。今これを

奈良より南大和へ赴かんとて、汽車にて畝傍に到り、一宿して、翌朝神武天皇の御陵を拜し、徒歩にて吉野山にたづね入りぬ。吉水院、吉野神社などに参りては、實に懷古の情にたへず。

と改めたらんには、語法正しくして、文意亦明なり。されば、

四
作文の際には、よく語句の斷續に注意して、其の語法を考へ、
文意の明に通ずるやうなさゝるべからず。

練習

左の文に於ける語句の斷續のよからぬ所を正せ。

一 松青きところ、色どり添ふるに桃の紅なるを以
つてし、自然は此の美をおくる。旅客を慰め、詩
人は彼の美を詠じて春に謝せんとし、藤澤の野、
山北の谷、人ごとに、唯、美しと叫ぶ。

二 鳥も自然の音楽を奏し、ある鳥の音は笛の如し。
ある鳥の音は琴の如し。また、ある鳥の音は胡

弓の如し。

次なる語句を繼ぎ合はして、意義の明なる文にせよ。

一 およそ、裝飾の品々は人力を費す。想像も及ば
ぬほどなり。さてその用はと問ふ。實益ある
にあらず。只僅に愛すべき色澤、光輝を身邊に
添ふるに過ぎず。

二 東京は道路四通八達す。都人は常に東西を以
て指さず。左右を以て辨ず。俗に京都は碁盤
割、江戸は阿彌陀割といふ。地圖を開いて見る。
その入りくみたること阿彌陀割の比にあらず。

○宿題

日章旗

此の文を作るには左に掲げたる語句を骨子とし、其の間によく斷續を考へつゝ、適當なる語句をはさみて、文語體の一文とするものとす。

日章旗は、我が大日本帝國の國旗。諸外國の國旗にも、それ〴〵大切なる意味を含む。日本の國旗にも深き意味あり。先づ色の上よりいふ。赤色は、日本も、支那も、西洋も、皆同一に誠を表す。赤心、丹心などいふ語も、これらの意味より出づ。日本の國旗は即誠の凝結せしもの。白色は平和を表す。平和にて誠を包む。地理の上よりいふ。日本は東に位す。日の出づる國

太陽東より出づ。その光を西に及ぼす如し。東の勢力を次第に西に及ぼす。進取の氣象を表す。日本の國旗は缺點なき徽章。國旗の精神を全國に及ぼす。國民の愛國心を起こす。名譽を海外に輝かす。

注意 前に示したる語句の結尾を變ずるは勿論語句中の一部を他の語に換ふるも妨なし。

應用文題

讀本中の文章の短縮又は敷衍

第二課 復文

報知文

報知に關する書翰文は、何事によらず、事柄を明に先方に知

らしむるためなれば、たとひ想像せば知るを得べしと思ふ事柄にても、細大漏さず丁寧に通知するをよしとす。殊に入組みたる事情などは、よく順序を立て、述べざれば明に知らしめがたし。

自體文によりて入組たる事柄を記さんには、餘程巧みなる書方を要すべきを、自分には知りたる事として、他人より見るに心附かず、勿卒に書きやるは、大なる不注意なり。又、事柄によりては、報知の不十分なるため、非常なる間違を生じて、先方に迷惑を受けしむることあり。よく心すべし。旅立、安着出發、歸宅、轉居、現狀、商況、送品受取等平常の報知は、正式、畧式の何れを選ぶも隨意なれど、危篤、死亡、其他火急の報知は、挨拶餘情等は畧し、單に用件を知らしむるに止むべ

く、殊に凶事には畧するを以て法とせり。
次なる文を口語體に直せ。

一人の旅立を知らす

御存じかはぞんぜず候へども、此度松山様の御隠居御夫婦にて、京都本山へ御參詣なされ、それより東京にて御修業中の御嬢様の方へ御出の上、暫くは彼の地に御逗留の趣にて、明後日二番の汽車に御乗込なさるべき旨承り候間、御出立の節は停車場まで御見送り申上度存居候。かねて御嬢様とは御同窓の由に承り居候故、何かと御傳言もこれ

あるべく、若し御存じなくてはと、念のため御知らせ申上候。かしこ。

注意 復文の際「し、こ」の事柄を轉換して適當に改むべし。

二病氣の知らせ

取りいそぎ申上候。今朝杉山清子様御病氣との事承り、早速御見舞に参り候處、思の外御重態にて、熱度高く、御衰弱の様子、醫師もなかくの御重症と申され候由にて、御家内様方も御心配一方ならず候。御許様には、いまだ御存じなき事と考へ、右御知らせ申上候。かしこ。

注意 復文の際想像にて、思ふ所に語句を増すべし

第三課 書取

左の語句中の文字を記憶して、命に従ひ書取るべし。

一物の價の異なるは、主として、需要、供給の關係より來る。

二實行すべき範圍に於て、適宜の増員を行ふ。

三職務に精勵して、其の結果を事實の上に發表す。

四最後の經驗としてこれを採用す。

五既に許可したる權利は放任す。

六 賣買の相場を標準として規約を定む。

七 現今交渉せる要求を容るゝは疑問なり。

八 洪水氾濫して堤防を破壊し交通杜絶せらる。

九 慈善事業に義捐すべきを勧誘す。

一〇 糧食の輸送に死力をつくしたる情報あり。

一一 陛下の還幸を奉迎す。

一二 龍顏殊に麗しく便殿に入御し給ふ。

一三 僥倖を冀ふは、着實なる態度にあらず。

一四 貴賓を招待して、晚餐會を開く。

一五 斯道の大家、圖書館擴張の講演をなす。

左の語句に於ける文字の誤を訂し、命のまゝ書取るべし。

一 銃を枕の夢の外には、父母兄弟の面影を見るよしもなく、日夜鉤煙禪雨の間に弛驅して、殺代なる空氣の中に生活せる兵士には、故卿の音信、わけても我が同砲の眞情籠めて作り調へし、熨問袋ばかり嬉しきものなし。

二 金剛石は、大低、山岳の最堅く、最舊き岩石の層中に混入せるを常とす。これを採掘するには、此等の岩石の崩壊せる處につきて、その沙礫を集め、これを河水に洗條して深し出すなり。

○宿題

火災見舞

左の作例にならひて文語體に作り、作文葉書に認めて出だすべし。

作例

地震見舞

只今新聞紙上にて承知いたし候へば、御地は非常なる震災にて、崩れ家、死傷など大分おはし候由、御宅様は堅固の御普請とて、御別状もこれあるまじとは存じ候へども、如何おはしまし候や。當地方は只陰鬱の天氣なりしだけにて、格別の

事もなかりしゆゑ、誠に驚き入り申候。御安否伺ひ度、取りあへず御見舞申上候。かしこ。

（女子葉書文範による）

見舞文は、病氣、天災、氣候の寒暑等につき、先方の安否を尋ぬる文なり。

見舞に關する文は、先方の身の上を思ひて同情を寄せ、如何にも眞情のこもりたるやう作らざるべからず。さに、頻に景物を書き立て、詞を飾り、口調を整へ、徒に筆を弄ぶ方主となりて、却て、主眼たる、安否を尋ぬる方は客となるの類、しばし見る所なり。かゝる書翰は、受けたる方いかに見るか、定めて深切なる情愛を感じずして、偶々作

文の巧拙を評する種とならんのみ。又、出だす方に於ても、先方を案ずる同情の念なくして、徒に文才をほこる慰み書きたるを自白するのみ。娛樂の文は、花鳥風月を評し、山川草木を論ずるはさることながら、和歌の如きものすら、古より誠心のこもらざるを非難す。まして、實用を主とする書翰にありては、眞心をこめたるものならで如何にかすべき。是れ大に諸子の誠むべき所なり。

應用文題

一 病氣見舞

二 水害見舞

三 留守見舞

四 時候見舞

五 盜難見舞

六 負傷せし人に

第四課 敘事文の要領

敘事文とは、自然と人爲とを問はず、すべて事實の移りゆく有様を、時の順序をおひて記述する文なり。

さて、あらゆる天地間の事物を記述する點よりいはず、敘事文も記事文も同一なれども、記事文にありては、只、その事物の如何なるものなるか、又如何なる有様なるかを、有りのまゝに知らしむるを主眼とし、敘事文にありては、その事柄の次へくと移りかはる状態を明に知らしむるもの、即、時に關係して記述するを本位とす。これその區別ある所なり。左の文を比較して見よ。

五月の氣節 (記事文)

五月の氣節を立夏と小滿といふ。立夏とは、即、夏の立ち始まる節にして、蛙の聲の聞ゆる時なり。小滿とは、草木

の繁榮して天地に充滿する初めの意なりといふ。又別に八十八夜と稱することあり。これは立春より數へたる名にして、苗やうやく延びて青疊をしきたる如き頃なり。

五月の氣節（叙事文）

五月の初めは立夏にて、いはゆる夏の節なり。蛙の聲漸くきこゆ。この月の一日又は二日を八十八夜といふ。立春より數へて八十八日目にあたる意なり。この頃は苗代の苗漸く延びて、青き疊をしけるがごとし。次は小滿なり。滿とは草木の繁榮して天地に充滿することなり。小滿といへるは滿の初めなればなり。

右の二文は、同じ文題なれども、前の記事文は、氣節といふこ

とを説明して、かゝるものなりといふに止り、後の叙事文は、氣節の移り變る次第を述べたるなり。かく、時の關係の有無によりて區別を立つるとはいへ、實際、文を作るに當りては、記事文中に叙事文を含み、叙事文中に記事文を混ざるのと少からず。

右の如く、叙事文は、時と關係を保ちて事實を記述するものなれば、一日の短きも、十年百年の長きも、皆叙事文の領分なり。されど、記事文に於て、趣旨と着眼とによりて、種類を異にするが如く、叙事文も、その組立方によりて、日記、紀行、傳記、歴史、戰記、物語、小説等の種類を生ずるものなれば、それゝ適當なる形式によりて、記述せざるを得ざるなり。

尙、左の文につきて叙事文を研究せよ。

紅蘭女史

紅蘭女史は、齡十七にして詩人梁川星巖に嫁せり。居ることいまだ數旬を越えざるに、星巖女史を顧みていふ「われ、しばし近國を漫遊せん。その間にこれを讀みたまへ。」とて、三體詩を與へて飄然として家を出でたり。（二）

女史は、しばしが程と思ひしに、待てども、待てども、歸り來ず。秋の雁は二たびかへり來たれども、何の玉章をももたらさず。春の花は三たび咲けども、訪ひ來る人のかげもなし。されば、離別せよな

どすゝむるものもありしかど、女史は拒みてうけがはず、日々に機によりて布を織りつゝ、三體詩を誦しけり。（三）

三年を経たる秋、星巖家に歸りて、かの詩は少しは讀みたりやと問ふに、女史は一句をも誤らで誦しけり。この後、女史は益書を讀み詩歌を學びて怠らざりければ、夫と共に四方を歴遊して、名聲大いにあがれり。（三）

女史は才學に秀でたるのみならず、裁縫のわざをはじめとして、家政の道にも精しく、琴にも熟達し、

又、夫を助けて、非常なる辛苦をなしたることあり。
實に女史の如きは、類まれなる婦人といふべし。四段

(女子國語讀本節略)

注意 此の文は四段より成る。第一段に、紅蘭女史が嫁して間もなく夫に別れしことをいひ、第二段に、夫留守中の有様をいひ、第三段に、學才の世に顯はれしことをいひ、第四段に、婦人の務むべきことは、すべて達したりしをいひて、女史の經歷を其の順序に述べたり。

第五課 叙事文

文題

山内一豊の妻

前課に於ける文例を參考し、左に記せる事柄を連ねて文語體に作れ。

一昔、山内一豊が織田家に仕へた初、東國第一の名馬だといつて、安土に牽いて來て商ふ者があつた。

二良馬ではあるが、價が高いため買ふ人がなく、空しく牽いて歸らうとした。

三一豊はほしさに堪へかね家に歸つて次のやうに獨語した。

世に貧しいほどくやしいものはない。我れは、今仕への始である。かゝる駿馬に乗つてまみえたなら、主公の御感じも殊に深からうものに。

四妻がそれを聞いて、次のやうな問答があつた。
妻其の價は。」

夫、黄金十兩である。」

妻さほどにおほしめさば、その馬をお求めなさい。
價は私がさし上げませう。」

五妻は鏡臺の底から、十兩を取り出して進めた。

六一豊は大に驚き、次のやうにいつて悦びもし恨みもした。

年頃、骨にもとほる貧の苦しみには、この金があるとも知らせず、よくも、心強く忍んだことよ。しかし、今この馬が手に入らうとは思ひもよらないことだ。

七妻は次のやうに答へた。

御詞は御尤でございます。しかし、これは、私が嫁

いで来る時、父が手づからこの鏡臺に入れて、此の金はおろそかに思つてはならぬぞ。必、お前の夫が、一大事の時に遣へ」と誠めて申しました。なるほど、貧は苦しいものゝ、世にありがちでございます。聞けば、このたび、都で御馬揃へがあるのと、さぞ天下の見物でございます。このやうな時に、良い馬に召して、君にも友にも晴れをなさればと思へばこそさし上げます。」

八一豊はやがて其の馬を求め、都で馬揃へのあつた時、信長から厚い感賞にあづかつた。

九一豊が一生の面目を得て、出世の緒を得たのも、偏に賢婦人の力によるのである。

○宿題

舌切雀

此の如く伽嘶はあまねく世に傳はれる所にして諸子も定めて知る所なるべし。今、その事實を次なる作例にならひて綴れ。

作例

狸の腹つゞみ

狐は奸智ありて疑多きゆゑに、彼れがよこしまにひがめる性を忌みて人愛せず。狸は癡鈍にして暗愚なれば人も憎まず。我れ筑紫にまかりし頃、ある寺に宿りける夜、あるじの僧の「あれ

聞きたまへ。今宵は月のさやけきに、狸どものあつまりて、腹つゞみをうつなり」といふに、耳をすませば、その音はるかに響きけり。砧の音にやあらんと疑へば、さにもあらず。向ひたる岡のこなたに、一むらの藪ありて、他には人家なし。狸どもそこに集りゐて打つなり。住持いふ。「我れ此の寺に居ること、凡九年になりぬ。過ぎし三年の秋よりして、人々この音を聞きつけぬ。我れもいぶかりて、其の處を尋ね見しに、只、狸が栖める穴のみあり」といふ。明くる日行きて見

るに、果して人家は絶えてなき地なり。「太平の民は鼓腹す」など、古語にもいへば、腹つゞみはめでたきためしにや。（柳澤淇園）

應用文題

一 桃太郎

二 孟母三遷

三 鶯宿梅

四 道風と蛙

五 清少納言の才學

六 我が知りたる逸話

七 歴史科にて學びたること

第六課 書取

左の文を熟讀して文字を記憶し、命に従ひて書取るべし。

一 英國の婦人

英國婦人が、多くの友だち打ち集ひて談話するを見るに、いと賑やかにて、喋々と語りのゝしり、笑ひさゝめく聲間斷無し。さるが中に、特に敬服すべきは、敢へて人の内情、隱微の私事をあばかず、又、假初にも、卑猥汚濁の件を口にせざることなり。要するに、女子も恭敬、謙讓の度を過ごして、人前に笑ひて、人後に泣き、陽に媚びて、陰に誹る等のこと少し。されど、我が親友が、他人より攻撃を受くる時

は、辯論抵抗して已まず。それが爲に、己れ亦非難を受けても、更に怖れ撓む所なきに似たり。余が英國の友には、日本女子を攻撃したる友人に對して、從來の交際を絶ちたるもの數人あり。かく、朋友間の交際に、信義あり、勇氣あり、表裏異ることなきことは、羨ましとも、羨ましき好風俗にこそ。

(女子國語讀本節略)

二 瀬戸内海

春霞、淡路の島山をこむるころとなれば、山影淡く空中に消え、一望の麥畝は、遠く浩蕩たる碧浪の末

と相接し、農家、漁舍その間に隱見せる風景、まことにいふべからず。漸にして、秋氣長空に滿ち、風霜島山を侵せば、林樹、或は黃に、或は紅に染めなして、宛錦繡を曝せるが如し。殊に小豆島なる寒霞溪の紅葉を以て勝れりとす。秋もいつしか過ぎて、嚴冬の節となれば、降雪の白色は、花崗石の白色と相映じて、益、その光を添へ、風趣更に一段の美を加ふ。

(高等女子讀本節略)

左の語句中、用法を誤りたる漢字を訂せ。

一 時間を尊ぶべし。

- 二百聞は一見に敷かず。
- 三暑氣に當てられて病に懸る。
- 四二兎を逐ふものは一兎を得ず。
- 五善く教を護るものは、能き行を成す。
- 六牛を引いて桃林を過ぐ。
- 七車を曳いて坂を上る。
- 八十五夜の月盆の如く丸し。
- 九國民は租税を收むる義務在り。
- 一〇雨を侵して友を問ふ。
- 一一雨の晴るゝを待ちて花を視る。

- 一二才を頼んで學を務めず。
- 一三友に因つて事を量る。
- 一四不良の行は謹まざるべからず。
- 一五暑中休業近づきて、楽しみに耐へず。

第七課 復文

左の文中の實例を成るべく縮めて、短き文語體に直せ。

禽獸の教育

ある博物家が、海鳥が、雛に遊ぶことを教へる所を、精密に觀察して書いて置いたものを、讀んだこと

があるが、慥に一定の目的と方法とが、具つてあるやうに思つた。まづ、親鳥が一匹の魚を捕へ、半殺にして、雛の頭より一二尺隔つた所へ放し、これを捕へさせ、幾度も同じ事をやらせて、一二尺の所ならば、百發百中、必、餌を捕へることが出来るといふまでに、雛の技術が熟練すると、次には、尙、一尺も隔つた、稍、遠い所へ魚をおいて、これを捕へさせる。かやうに次第々々に導いて、終には、全く手放しても、獨立の生活が出来るであらうと、見込の付くまでに仕上げて、然る後に、親鳥は實際雛を手放すの

である。先年、上野の動物園で、鶴が雛をかへしたときも、雌雄の親鳥が、丁寧これにこれを養ひ育て、初は鰯を小さく切つて食はせ、次には鰯を水中に泳がせては、これを捕へる練習をなさしめ、雛の翼が少しく發達してから、は、親鳥が先に立つて、一度左へ向うて飛べば、次には右に向うて飛ぶといふやうな順序に、規則正しく飛翔の方法を教へて居るのを見た。

次に、獸類について見ても同じことで、子を教へる種類は決して少くない。猫を飼つた人は、善く知

つて居るであらうが、親猫が鼠を捕へると、必、これに傷をつけて、全く逃げ去ることの出来ぬだけに弱らせおき、生きたまゝで、これを子猫に與へて、鼠を捕へ囓み殺すことの練習をさせる。印度で虎狩をした人等の書いたものを見ると、同じ様な事が書いてある。即、親虎を打ちとつてから、その巢を調べて見たら、山羊や、野牛の屍體に、頸などの如き急所には、大きな齒の痕があるが、他の所には、小さな子虎の齒の痕が、澤山ついて居たといふことである。これから推して考えると、猛獸類では子供

に餌となる獸類を、捕へたり囓み殺したりすることとを練習させることは、常であるやうに思はれる。

(高等女子讀本節巻)

第二學期

第一課 用語用字の正當

およそ文章は、記事にもあれ、叙事にもあれ、又は書翰にもあれ、それ〴〵適切なる用語、用字あれば、勉めてこれによるべきものなり。さもなくて、勝手に新熟語を作り、或は思ふまゝに漢字を用ふる時は、中には笑ふべき熟語も生ずべく、又は意義を誤りたる所もあるべく、折角苦心して組立てたる結構も、これがために、其の價値を損するに至るべし。然るに、從來用ひ慣れたる用語、用字は、正確、穩當なるものにして、我等の以て模範とすべきものなれば、講讀などの際には、

常に注意してこれを記憶し、作文の時考へ出して應用せざるべからず。

女子は大聲を出だすを、用ゐせざれども、常に音聲を明かに、緩速を程よくすべし。然らざれば、聴く人を不樂ならしめ、また、往々おのが意心を相手に報ぜずして、誤を成じ、信を敗るなどのことも在るべし。

此の文を見よ。用語、用字の正當ならざるゆゑに、一讀して其の拙きを覺え、且、意義の不明なる所あるを見るならん。今これを次の如く改むれば、正確、穩當なる文となるなり。

女子は大聲を出だすを要せざれども、常に音聲を明かに、緩急を程よくすべし。然らざれば、聞く人を不快ならしめ、また、往々おのが意思を相手に通ぜずして、誤を生じ、信

を破るなどのことも有るべし。

練習

左の語句中に於ける用語用字の穩ならざる所を訂せ。

- 一 習ふより狎れよ。
- 二 失破は成効の基。
- 三 有益なる業物には心を止むべし。
- 四 灣中波動かずして、青蒲團を敷きたるが如し。
- 五 日々御機嫌よく遊ばされ候や、相伺ひ申度候。
- 六 此旨御兩親へも御申し聞け下され度候。
- 七 恐入り候へども御傳へ成さるべく候。

八 船に乗りて異國に迎ひ、万里の旅路に付けるは心細し。

九 我が國に於ける職人の工場に望むや、火を焚き、煙草を吞みて、至急に出手せず。

一〇 果木の植培には、日光と土性とに注心せざるべからず。

左の語句中片假名の處を漢字になせ。

一 ユクものありカヘルものありて、頗賑はし。

二 君に遊學をス、むれども君キカズ。

三 日暮れて月のノボるを待つ。

四 國事にタフレしものを神としてマツる。

五 死體をトきて病理をトく。

六 貴重品を箱にイれてオサむ。

七 後をカヘリみ手をウツて笑ふ。

第二課 記事文

茶の湯と生花

凡そ茶を味ふに三様の法あり。煎茶、薄茶、濃茶と
れなり。薄茶、濃茶には種々の方式あり。これを
茶の湯の式と名づく。高雅なる遊なり。

茶の湯は足利時代に生まれり。その流派甚だ多
きが中に、最も廣く行はれたるは、表裏の千家流な
り。今もなほ中流以上の社會にては、紳士貴女の
嗜みとして行はる。

茶の湯と離れざる關係あるものは生花なり。生
花とは、手折りたる花を、瓶又は盆に移し生けて、室
内の風情を添へ、床の間の飾りとなす法をいふ。
是にも池の坊流、遠州流、石州流などいふ諸派あり。
花を生くる器にはいろくありて、花の種類、花の
生け方、何れも器につれて差別あるべし。又、床の

間の位置、掛物の種類、庭の趣などによりても、生け方及び置き方に多少の工夫あるべきなり。これを要するに、茶の湯の本意は、主客の秩序を正し、行住、進退の作法を定めて、溫雅、清閑の交遊法を教ふるに外ならず。故にその精神に通ずることを得ば、必ずしも、くどくしき儀式を學ぶに及ばざるべし。

生花もまた同じ理なり。強ひて、枝を曲げ、作り撓めて、自然の風情を損ひたるは醜し。なまなかにある流儀になづまんよりは、手折りたるまゝを投

げ入れたるが、風流の本意に叶ふことあるを忘るべからず。(國語讀本節略)

右の文中の適當なる個所に、左の事柄を適宜にはさみて一文とせよ。

一 急須、土瓶などにて、普通の茶を煎じ出だして用ふるを煎茶といふ。

二 挽茶の少量に熱湯を注ぎ、これをかきまはし、泡立たせて用ふるを薄茶といふ。

三 薄茶の時よりやゝ多量の挽茶に熱湯を注ぎ、かきまはして用ふるを濃茶といふ。

四茶の湯の流派は、千家の外に、有樂、金森、石州、遠州等あり。

五茶の湯の式は、その昔は、清雅なる娯樂の間に、禮儀作法の要旨を教へて、武人の荒々しき心を和らげ、兼ねては、奢侈を戒めんための遊なりしが、徳川氏に及びては、一種の表だちたる禮式として用ひらるゝに至りたり。

六生花は、昔、推古天皇の御代に、聖徳太子が、花の枝を水に生けて久しく保つ法を、小野の妹子に授けさせたまひしに始まるといふ。妹子はいは

ゆる池の坊流の遠祖なりとぞ。

七花を生くる器には、瓶を用ふるを通例とすれども、時としては、竹筒、砂鉢、薄端などいふ器を用ひ、又、花籠をも用ふ。

注意 語法、語脈の轉換は隨意たるべし。

○宿題

秋の野川

次なる作例にならひて、水清き野川の景色を面白く作れ。但し、作例中の語句を用ふるも妨なし。

作例

秋の山中

騒がしかりし木々の蟬は、何時しか、松虫、鈴虫の
 聲とかはりぬ。はや秋なり。

谷陰には、萩、桔梗など咲き亂れて、薄も穂を出だ
 す。栗の實ははじけて飛び、柿の實もおひく
 赤くなる。都會の人々、うち連れて茸狩に來た
 る。松茸、初茸、しめぢなど、木の根、落葉の下など
 に求むべし。子を孕みたる蝮の人を見て飛び
 附くも今ぞ。

山雀、目白、頬白など、朝々聲高く鳴きて、奥山より

野邊へと出づ。處々霜おりて、谷川の邊りには、
 はや赤き梢も見ゆ。

高き山より湧くかと思ゆる雲、かなたの岡の頂
 をめぐりて、定めなく降る雨に、谷間の花は大方
 しをれて、木々の葉の色、いろくになりゆく。

櫨、楓は赤く、銀杏、檜、栗、櫟は黄となる。其の色、日
 に照りをひて、山の姿一度にかはり、古金襴を懸
 けたるが如し。

家の軒には干柿赤く連なり、樵夫は日毎に柴を
 刈りて、路ばたに積み上ぐ。

とかくするうちに、木枯の風、朝夕吹き荒れて、峯も谷も落葉舞ひ立ち、木々枝まばらになる頃には、柚の煙こゝかしこの岡に見え、獵銃の響折々聞こゆ。里の家々は藁がこひとりぐにして、暫くは冬ごもりの用心にいそがし。（坪内雄蔵）

應用文題

一 茸狩

二 栗拾ひ

三月見

四海の眺め

五嵐の翌日

六夜の雨

第三課 送假名法

文章中の漢字を、音讀にするか、訓讀にするか、又、數様に訓讀するものゝ中、何れに讀むべきか紛るゝ時に、別に假名を下に添へて識別す。これを送假名といふ。

送假名は、文章中大切なものにして、送るべきものを送らざるか、或は送り方を誤る時は、意味異り來りて、不明の文となる。たとへば「往來」と書きてそのまゝならば、道路の意となり、これを「ゆきき」と讀ましむるには「往」に「き」の送假名を添ふれば、明に其の讀み方を知るを得。又「立つる木は立つべき木なれど、之を立つ木」とるを抜かして書く時は、立ちたる木の意となるが如し。かく送假名の如何によりて、意外な

る誤りを來たすものなれば、常に注意しておるをかにすべからず。
送假名は、文法教授の時に、精しく學ぶべければ、こゝにはその大體の法則を示すべし。

名詞

一本來の名詞は送らず。

例 花 馬 日本 紫式部 夢

二動詞より來たれる名詞は送る。

例 預け 預かり 暮れ 暮らし
讀み書き 起き臥し

三動詞より來たれる名詞の、誤る恐れなきものは送らず。

例 霞 帶 光 樂 爭 趣

四形容詞より來たれる名詞は送る。

例 高さ 低さ 樂しさ 苦しき
静けさ 白面げ 深み 赤み

五熟語の名詞にして誤る恐れなきものは送らず。

例 受取 書取 小包 雇人 質入

代名詞

一代名詞の二様に讀まるゝものは送る。

例 我れ 我が 彼れ 彼の 其れ 其の

二紛れざるものは送らず。

例 汝 君 私 我等 我輩

形容詞

一本來の形容詞は語尾を送る。

例 長く 短し 嬉しき 悲しけれ

二動詞より來たれる形容詞は、動詞の語尾よりおくる。

例 思はしき 喜ばしく 疑はしけれ

動詞

一語尾の轉ずる處よりおくる。

例 讀む 書き 見る 老ゆ 起くる

二同字にして自動他動の別あるものは、自他の分るゝ處より送る。

例 自動落つ 治まる 動く 及ぶ

他動落とす 治む 動かす 及ぼす

三熟語となりたる動詞もすべて前の如し。

例 傳へ聞く 引き受く 言ひ盡くす

副詞

一本來の副詞にはおくらず。

例 猶 皆 頗 稍 若

二動詞形容詞より來たれるものは各々其の法による。

例 至りて 因りて 果して 能く 惡しく

三一字にて重りたる詞をあらはすものは、右下に「く」を附す。

例 各 屢 益 愈

接續詞

一本來の接續詞は送らず。

例 又 且 將

二動詞より來たれるものは其の法による。

例 及び 尋いて 依りて 并ひに

第四課 復文

左の文を候文に改めよ。

書翰文の心得

手紙の文は、年始、暑寒の訪ひ音づれより、月花の折に友を誘ひ、よろこばしきをいはひもし、うれひ、なげきを慰めもし、親しき中には、忠告、教誡などもすべく、唯まのあたりならば、あれよこれよと口にすべきを、筆にいはせて、心通はさんまでの業なり。されば、用語のむつかしきを求めず、極めてわかり

易く、すなほなる詞もて、事の筋明に、次第、正しう書きなしたらば、その外に事なかるべし。

文は短くして、事のわかり易きが第一とて、本多某が陣中よりの文は、いつもくためしに引き出でられては、世にほめたゝへらるれど、そは折りからによるものなり。短くてありぬべき時あり。長きを人の樂むことあり。

遠く離れて、逢ひ見るに難く、唯、大空をうち眺めては、故郷の人々、今、いかに暮らすらん、野山のさまもなつかしく、里の童、鎮守の森と、さまぐ思ひ續く

る折親しき友より文の來たる、いかに嬉しきこと
ならん。封じをとくも、もどかしう、見るに、暑さ寒
さ、いかに暮し給ふ、この程、此處にもかはりなし、御
左右承りたしとのみあらんは、その口惜しさ想ふ
べし。かゝる時の文の上にては、雜事とて、うち棄
つべきものなく、一本の草、一頭の犬、盡く見る人の
慰めになりて、其の人いと懷しうなりぬべし。
短くてよかるべきは、近火、負傷の見舞。すべて、不
慮の事に、人の心あわたしからん折いと長々と
書き續けたる、見るもうるさし。萬に時といふは、

必、見るべきものなり。似合はしからぬ事は、何事
にても、人の心を痛め、煩を増し、思の外の怒を招く
こともあり。

人の許へ物頼みにやる文に心づくべく、斷りの文
は、詞やはらかに、己むを得ぬさまを細かに書くべ
し。老いたる人に、今様の賢げなることいひ送る
と、その道の心得なきあたりへ、我が知れるさまに、
歌などよみこみてやるとは無禮なり。

いひ續くれば、かれこれいと多く、心がくべき事、様
々あるべけれど、すべて、事の様を思ひはかり、文か

き出でん時、なほざりならざるやう、なしたきことなり。(高等女子讀本略改)

注意 此の文は、本、書翰文にあらざればそのまゝ用ゐるとしては不都合なる語句多かるべし。故にかゝる語句は其の意を取りて書翰文の體裁に改むるものとす。

又此の文は、たゞに復文として出だすのみならず、一には、書翰の心得を知らしむる爲めなればその心にて注意すべきなり。

○宿題

松茸を贈る

其の後は御遠々しく御無沙汰いたし居候。相變らず御すこやかに入らせられ候や。さて、私

事、昨日の祭日を幸、五、六人連れにて、近き山に茸狩りに参り候。當年は生立ち非常によろしき趣、噂に承り候ものゆゑ、持ちきれぬほど取れたらばなど話し合ひつゝ、一日狩り暮し候へども、慣れぬものには一向取れ申さず、やうやく二、三斤持ち歸り申候。山の麓に住まひ候身には、何とて御目にかくる品もおはさず、餘り少々には候へども、只、珍しきを取り所に差上候。こればかりは、都よりも立ちまさる田舎自慢にもと御笑ひ下され度候。かしこ。

右の文に對する返事を作れ。

人に物を贈るには、儀式立ちたる時もあり、又、懇意にまかせて時々物を贈る場合もあり。儀式立ちたる物に添ふる文は、主として禮を正しくすべく、一時の物に添ふる文は、たとひ品は薄くとも、情の厚きを以て宜しとす。されど、すべて贈遺に關する文は、先方に對する厚意をあらはすものなれば、如何なる時にも禮と情とは兼ね備ふべきものと心得べし。親しき間柄なりとて禮なく、儀式のものなりとて情なきは、大なる誤なり。要するに先方をして快く贈物を受けしむるにあるなり。贈物を謝する禮狀は、先方の厚意のある所を十分謝し、喜んで受けし次第を鄭重に述べざるべからず、されど、餘

り丁寧に過ぎ、或は喜びをあらはさんとて、有り得べからざる事などいふは、反つて先方の感情を害ふものなれば慎むべし。こは、只、贈物の時のみならず、すべて事を謝する場合には、皆此の心得あるべきなり。

應用文題

一 産着を贈る

二 寫眞を贈る

三 我が庭園の柿を贈る

四 人より贈られし物を分つ

第五課 書取

左の文を、特に假名に注意してよく讀みおき、命に従ひて書取るべし。

無益に時を失ふこと勿れ

幼きより、さかりになり、おいに至り、おとろへて死に至るまで、百とせのよはひも、亦いく程なし。ひとの世にあること、假りにやどれる旅人のごとし。東坡が詩に、「一年一夢の如く、百歳眞に過客」といへるもうべなり。かくみじかき此の世なれば、無用の事をなして時日を失ひ、或はいたづらになすことなくて、この世くれなん事をしむべし。常に時日を惜み、益ある事をし、善をすることを樂みて過ぐさんこそ、世にいけらんかひはあるべけれ。(貞原益軒)

左の語句中、傍線のある字には假名を施し、空所には送假名を附けよ。

一 ひとわたり、笛ふく業を覺○ぬ。

二 鳥の囀る聲、遠くも近くも聞こ○なり。

三 今にして怠らずば、後に至りて悔○なからん。

四 山の形、水の色、繪にかくとも、筆及ぶまじ。

五 楫なくて船をやり、轡なくて馬に乗る。

六 今宵は月もよし、酒すゝめ參らせん、強○て醉○

給○。

七 潮満ちたる時は、海上平にして穩なり。

八人の家には、生死、病苦、又は、水火の憂○など、必、あることなれば、豫、其の備○なくては叶○ぬ事なり。

九萬の事、ものしり顔する人は、笑○を招くものなり。

一〇秋來ぬと、目にはさやかに、見○ねども、風の音にぞ、驚かれぬる。

第六課 日記文

日記には、日附、天氣模様、溫度、及び、一身一家の出來事を、其の

要點をつまみて、經過の順に、簡明に記すものとす。又、其の日の所感をも書き入るゝは面白し。されど、日々定りたる事、其の他、必要なきことは記さざるがよし。たとへば、三度の食事、朝夕の掃除等は、別に出來事ともいふを得ず。又、記したりとて、必要も趣味もなきことなり。故に日記文には記すべき事柄を選ぶを最肝要とす。

又、日記は作文の稽古として、最有効なるものなり。第一、日々怠らず記す時は、自ら習慣となりて、たやすく筆を執り得べく、知らずゝ文を綴るに達者となるなり。第二、記事は日々起る實際手近の事柄なれば、心を勞すること少くして、割合に好材料を得べし。されば、日々記す習慣をつくりて、一は實用のため、一は作文のため、必、怠らざるを要す。

文例

一 休暇日記

七月二日 今年もなかばは過ぎにけりと隣の
女兒うたふ。

三日 半夏生却りて雨なり。籬の楓の枯れし
あとに女竹五竿植う。

今植ゑた竹からも来る嵐かな。

とは、古人の句。雨洒ぎて婆婆々々、木には見
られぬ趣深し。

八日 三日月清し。今夕はじめて近きあたり

の大榎に鯛の聲を聞く。

十三日 隣家の翁杉籬ごしに泰山木の花咲き
たれば見に来よといふ。行きて見る。葉は
ゆづり葉のをれに似、花は白木蓮を三つ四つ
も合はせたる程にて、芳香たとへむ方なし。

富麗にして、しかも品高き花なり。

十六日 去年近所の林より掘り来りし山百合
は越めて開く。逗子あたりは、六月の中旬を
盛とするに、六月も後れたる。其は今年の氣候
上の故なるべし。

十七日 嫁菜の花一輪咲く。こは去秋京都に遊びて、山陽先生の山紫水明處の下なる磧より、掘りて來りしなり。午後、澁谷の川に鮒釣に行く。水まさりて青蘆を没し、川柳の偃して小きアーチを作れるを、心得がほの水馬、ついく、潛り行けば、犬蓼の花搖ぎて、小き蛙のざんぶと水に飛びこむも興あり。時々雨ざあとしぶきて、風景みるく、淡墨の畫になりゆく。傘、蓑笠をここゝ見えたれど、獲物ありとも思はれず。吾も一尾を得ず、蝸に螫され

て歸る。

十八日 菊に肥料をやる。花を愛しそめて、いっしか肥料もいとはしからずなりぬ。肥料を愛づるにあらず、花を愛すればなり。清濁併せ吞むといふこと、耳の痛きほど聞き知り居れど、わが量狭ければ、異を嫌ひ、非を惡みて、みづから世を窄うす恥しき事なり。

二十日 朝の程、日影としたれば、貝細工の花いと美しく開きしに、やがて曇りたれば、乾びたる鱗々の花瓣、みるが内につぼみぬ。

廿五日 晴。夙起小園を歩すれば、蚯蚓の聲清く、杉籬の蛛網、露を帯びて白絹の光あり。ハ撫子花、ひあふぎ、百日草、千鳥草、桔梗、ひまわり、金蓮花など、露に濡れをぼちて、夢いまだ醒めじと見ゆ。夕方、樺色の雲、西隣桔槔の上に浮びて、蛸の聲涼し。(徳富氏の文節略)

二田園日記

九月一日 朝いと涼し。曇勝なる空より、日影をりく漏る。風なし。「今日は誠に結構な二百十日で」と、垣ごしに隣の人挨拶す。梨畑

に棚をつくる。竹をきり、索を結び、午に至りて成る。午後玉蜀黍を引く。夜に入りて雨。二日 曇。裏山につくくぼふしの聲かしまし。小藪の中なる棗の實の、漸く色づきたるを、悪太郎ども謀りて取らんとせり。午後三時ごろ霽る。蜜蜂の巢を窺ふに、出入いをはし。茄子の畠を打ち反して、葱畠よりねを作る。夕方西北の風。三日 曉より雨降る。友を訪ひて夕暮に歸る。雨やむ。蟲の聲にはかにさわがし。

四日 陰晴さだまらず、雲に殺氣あり。この朝、殊に冷なるを覺ゆ。ウオシントン傳を讀み、その大人物なるに感心す。雨驟に降り出で、また、忽やむ。畑に出で、草を抜き、韭を移し植う。一株毎に白き花咲きたり。

五日 陰曆八朔。舊例により、餅つきて祝ふ。小雨しとくくと降る。晝過ぎやうく霽れたれば、松原に散歩す。

六日 終日雨。畑のものも、庭のものも、皆腐り果つる心ちす。風なし。

七日 雨なほ止まず。

八日 今日も雨やまず。風さへ吹き出でたり。洪水あるべしなど、噂とりどりなり。我が畑を見れば、葱はさながら髪を亂せるごとく、蕃椒は仆れて、地に這ひたり。夜更けて、風の音すさまじ。

九日 思の外に、雨霽れんとす。をりく蟬の聲漏れ聞こゆ。六日の東京新聞、いまだ届かず、都の秋はいなならん。夜は五日月芋の葉にさやかなり。

十日 二百廿日。一天晴れ渡りて、風おだやか
なり。野川に釣せんとて家を出づ。稻の花
已に散りて、穂は、はるばると千里の波を寄せ
たり。「この調子なら、今年は豊年だ。」など、道
行く人の語る。夕方、鮒すこし獲て歸る。

(ほととぎす)

○宿題

一週間日記

教師より、日を定め給はゞ、前課の文例にならひて、一週間の日記文を
作るべし。

應用文題

一日記の一節

二日曜日の一日

第七課 記事文

作例

猫の命名

人は、賢、不肖とも、自己の識見はありたきものなり。昔、或、なま好事のものありき。或時、鼠を防がんために猫を飼ひぬ。毛色黄ばみ、形大きくして、たけぐしく、さながら、畫ける虎に似たれば、虎と名づけて寵愛せり。友人來たりて、其の

故を問ふ。答ふるに其の意を以てす。その人のいへるやう、それは、まだ至らぬ沙汰なり。虎より強きものあり。世に龍虎といへれば、龍こそまされ。」といふ。「さらば、その意に隨はん。」とて、龍と名づけぬ。然るに、また、さる人の來たりて、それも至らぬなり。龍を載せて空を走るのは雲なり。」といへば、また、雲を吹き散らすは風なり。風こそよからめ。」といふ人のありけるまゝに、風と名づけ置きたるに、又、人ありて、何ほどはげしくとも、吹き破ることの叶はぬは壁な

らん。」といへば、いよく惑ひて、いか名づけてよからん。」と、あたりの人に問ひければ、壁も呼びにくからん。壁に穴を穿つものは鼠なり。それを捕ふるものは猫ならん。」といはれて、はじめて心づきたりといふ。これ、已れ識見なきが故に、こゝに問ひ、かしこに尋ねて、いよく迷へるなり。あまりの好事は益なきものなるべし。

(徐階東海)

注意 此の文は、大體記事文なれど、中間の話は叙事となる 即、叙事的の記事文なり。」

文題

河豚汁

左に示せる題意と結構とにより、前の作例にならひて作るべし。
 題 意

或、數名の人が寄つて、河豚汁を食はうと思つて、澤山に出来ることは出来たが、いざとなつて、一番に箸をとる者が無い。そこで「乞食に一盃やつて、毒の有り無しをためしたらよからう。」と、衆議一決して、近所の橋の袂に持つていつてやつた。歸つてから、小半時たつて、いつて見た處が、別に變つた様子がない。これなら大丈夫だと、残らず食つてしまつて、ぼつぼつ前の橋の處へいつて、どうじや、最前の汁は甘かつたか。」と問ふた。すると、且那樣も召し上りましたか。」といつたから、お、皆くつた。」といつたら、乞食は

隠してゐた碗を出して、それでは、私も頂きます。」といつたとさ。

結 構

第一段 河豚汁を造り、毒をおそれて、先、有無を試んと乞食に與へしこと。

第二段 乞食を試んとして、反つて乞食に試られしこと。

第三段 人を陥れて、已れ利を得んとせば、遂には、自ら不利を招くに至るといふ誠を説くこと。

應用文題

級中又は學校の出來事

第八課 書取

左の文をよく讀みて、命のまゝに書取るべし。

大高源吾より母に贈る書翰の一節

一、私事、今度江戸へ下り申す存念、かねても御物語申上候通り、一筋に、殿様御憤りを散じ奉り、御家の御耻辱をすすぎ申度き一筋にて御座候。且、こは侍の道をも立て、忠のため命を棄て、先祖の名を顯はし申すにて御座候。勿論、大勢の御家來にて御座候へば、いかほどかく御高恩の侍も御座候處に、さしての御懇意にも遊ばし下されず、人並の私

儀にて御座候へば、此節、大抵に忠をも存じ、長らへ候て、御そもじさま御存命の間、御養育仕罷在り候ても、世の譏りもあるまじき、わらはにて御座候へども、慙に、御側近く御奉公相勤め、御尊顔を拜し奉り候朝暮の儀、今以て片時も忘れ奉らず、誠に大切なる御身を捨てさせられ、忘れがたき御家をも思召し放たれ候て、御鬱憤を遂げられ候はんと、思召しつめられ候相手を討損じ、剩あさましき御生害を遂げられ候段、御運の盡き候とは申しながら、無念至極、恐れながら其の時の御心底、推量り奉り候

へば、骨髓に透り候。時節と申し、所と申し、一方ならぬ御無調法ゆゑ、天下の御憤り深く、御仕置に仰せ付けられ候事に御座候へば、力及び申さぬ事、全く天下へ御恨み申し上ぐべきやう御座なき儀にて候故、御城仔細なく差上申たる事に御座候。

左の語句中、用法を誤りたる文字を訂せ。

- 一 昨日は異約いたし御用捨なし下され度候。
- 二 音楽會へは妹と一所に參る筈に御座候。
- 三 先日は誠に調方なる御品下されありがたく存じ候。

四 此度の洪水には御別狀これなく候哉。

五 昨夜は御親切に御尋ね下され候處、合憎不在中にて失禮いたし候。

六 彼の人は招台すとも、所先來るまじ。

七 日寄よき時を見て遊散に出かくべし。

八 當坐の機轉を聞かす。

九 料理の味は醤油と砂糖とにて安配す。

一〇 彼の人とは實懇にする領見なり。

第三學期

第一課 用語の一致

文語には文語の法則あり。口語には口語の法則ありて、明に區別せらるゝは、已に文法にて知れるならん。されば、作文に於ても、其の區別を正しくして、決して混用すべからず。彼の書翰文中、起首、用件等は口語體にして、結尾を文語體となし、或は全文中至る所に「候」もあれば「ます」もあるなど、實に不注意極まるもの、世間往々見る所なれど、是等は不注意といふよりも、むしろ、無考といふの外なく、こゝに論ずるには、足らざれど、普通の文章にありても、實際、口文兩語中には、其

の區別實に紛はしく、やゝもすれば混雜を來たすものあれば、深く注意せんことを要す。

さて、口語と文語と、最、混用し易きは、動詞、形容詞の活用、及び、助動詞、助辭の接續なり。今、左に其の例を示さん。

口語

朝早く起(き)くれば氣分がよい。

日が暮(く)れて門を閉(と)づ。

道の案内さ(せ)するに都合が宜(い)し。

只一人、夜道を行くと誠に淋(さ)し。

手入が悪(わる)いと木は枯(く)れん。

雨が降(ふ)らんとする時は、傘を持(も)つて行け。

人に信用(しんよう)されねば不利益である。

紙に記せし事を忘ると答が出来ない。
 東京より京都まで幾里ですか。
 あの人は勉強家なれども、交際はへたである。

文語

兒を愛して頭を撫てる。
 今夜から夜學を始めることになりたり。
 地寒くして蟲死ぬる。
 雨降りて道路甚惡しし。
 身は賤しとも心は高し。
 運動さする心にて旅行に出だす。
 母、姉に妹を呼ばしめる。
 繪かゝれば、かき見て見よ。

學科は十分調べり。

石鹼で洗ひし後、水ですぐべし。

讀み讀み書きたれば字拙し。

右は誤りやずき一例にして、此の外なほ多かるべし。常に
 心を用ひて其の弊に陷る勿れ。

練習

次なる語句を正しくせよ。

- 一 讀本中の妙文は諳誦するべし。
- 二 此の處に塵棄てべからず。
- 三 戯に弓を射せしむ。
- 四 教授された事は忘るゝな。

五手紙書くことは既に教を受けり。

六我が家にはボチなる犬居る。

七華美たる風俗は甚宜しからず。

八洋々なる音楽と共に式は始りぬ。

九下女をやつて大根を買はしめる。

一〇遊ばふとて外に出た。

一一床には南天と福壽草が並べたり。

一二昨日は友と公園に遊びし。

左の口語體を文語體に直せ。

一何でも物知り顔をするものは、人に笑はれるこ

とが多い。

二金は天下の寶で、これを貯へると結構だが、これによつて命を失ふこともある。

三冷水養生法は、時間もかゝらず、費用もいらず、こんな、簡便で有効な方法は、外にはございませんまい。

四日光には名高い門がございまして、見てをると、其の美しさに日が暮れるのも忘れるといふほどで、日暮門と申しますが、本當は陽明門といふのでございます。

五源義家でも、平忠度でも、武人でありながら歌が上手で、今にも、其の歌が残つて居ますが、文武兼備とは、此の事をいふのでありませう。

○宿題

福引

左の作例にならひ、各自知れる所を材料として、想像にて對話文に作れ。

作例

一月のはじめ、友達のところから、福引をいたしますからと、呼びに來たから参りました。そこには二十人ばかり居まして、題は東京名所見立とい

ふのでございます。屠蘇も飲み、御馳走も戴いてゐます中に、「さあ、お引きなさい」と、圖が出ましたから、皆々引きますと、後から開いてゆきます。二重橋といふのを見ますと、重箱二つに箸がそへてあります。牛込といふのは、張子の牛が俵を負んで居るのでございます。皮の袋に砂が入れてあるのは、小石川で、鴨と、丸勘の印のある徳利は、巢鴨、絲尻の無い盆に團子が盛つてあるのは、團子ざか、手帳に折手本は、本所、かやの實が一粒は、市がや、摺附木をうつたかく積んである

のは、まつち山など、澤山ありましたが、皆は覚えませぬ。

さて、自分に引いたのを見ますと、「すみだがはら」と書いてございます。「古歌に、隅田河原とよんであるのは、駿河の名所で、東京のは、昔から隅田川といつて、隅田河原といふ例はございませぬ」といふと、主人は笑つて、「昔はどうでもよろしいが、この頃の日でり續きて、殆、河原になつたからでございます。」といつて炭俵を出されました。「これはすみだはらで、がの字がございませぬ。」

といふと、笑つて、「この一月の空に蚊が居ませるか。」と申します。「いや、かてはありませぬ、かと濁つてゐます。」といひ張りましたら、悟りのわるい人よ、最早、すみだ川と濁つてゐますから、此の上濁りやうはございませぬ。」といはれたのが、一番をかしうございました。
(中村秋香氏の文譯略)

應用文題

一ペンボン

二級會

三試筆

四神詣て

五園の掃除

六合奏

第二課 書取

左の文中の文字を記憶し、命に従ひて書取るべし。

徳川氏の初世に當り、茶博士多く輩出せしかども、小堀政一の如く、美術思想に富み、百般の工藝品に己が意匠を加へ、後世に傳へたるものなし。

予嘗、孤蓬菴に至り、政一の壽像を見しに、衣冠を着し、傍に劔を置き、脇息に凭りて、假寐せるさまを畫き、其の上に、春屋和尚の讚あり。予、久しく熟視して去ること能はず。遂に畫工を倩うて、其の像を寫さしめたり。

遠州はじめ、八條宮御二代智忠親王の、桂御別業を増築し給ひし時、將軍家の命を蒙り、伏見より屢、京に上りて、十分に己が意匠を施す事を得たり。遠州の命を奉ずるや、三事を誓ふ。曰はく、御催促なき事。曰はく、御助言なき事。曰はく、御費用御構なき事。是なり。當時、遠州が、この御別業に、畢生の力を盡さんとする覺悟の程、思ひやられぬ。宜なるかな、建築法、作庭法、併せ得て、共に千古の模範となる。眞に遠州の面目といふべし。新御殿には、唐木の眞御柵の如き、精密なる意匠を施し、又、松

琴亭には、八窓の圍を設け、賞花亭には、暖簾をかけて、山家の様を寫せるなど、自、精疎の法備り、庭園の如きも、丘陵もなき平地にして、意匠の施し難きにも拘らず、二町四方に種々の景色を寫して、到る處その趣を異にせるが如きは、後人の企て及ぶ所にあらず。就中、松琴亭、流れの手水は、古來遠州の絶技といひ傳ふ。

左の語句中、片假名の所に漢字を當てよ。

一 汽車や電車は早いけれど、昇降のコンザツには、ズキブン、コマる。

二 舶來物が貴ばれるやうでは、工業上、スコブル、キカンなことである。

三 イヤシクモ人間として、ヤバンなキョドウが有つてはならぬ。

四 アニ、タンソクにタフベけんや。

五 コツケイなる態度にて、シバシバ、人を笑はしむ。
六 子として父母の命にシタがふは、モチロンなり。
七 瀬戸内海は勝地に富めども、ナカンヅク、イツクマを以て第一とす。

第三課 復文

左の文中の、用字用語の正常ならざるものを訂し、而してこれを口語文とせよ。

富

凡そ品性の何たるを問はず、他物と交換し獲べきものは、これを富といふ。この富をわかつて、有形、無形の二品とす。

有形の富とは、什具、商物等の如く形を有して、他物

と換交し得るものをいひ、無形の富とは、才智、藝力、權利等の如く、形はなけれど、これを用ひて、他の物品を得る力あるものをいふ。

富の要件は全く交換力に有り。故に、昔日は富にあらざりしものも、世の進歩に順ひて、交換力を成じて富となるものあり。又、昔日は富の一部たりしものも、其の交換力を減じて、大にその價額を損せるものあり、或は全く無用の永物となれるものもあり。

富には、一定不動の價格なきこと此の如しと雖、苟

も交換力を有するものは皆富なれば、天下に人間の求用に報ずるもの、増加するは、是れ即富の進歩するなり。然るに、中世全く富の性質を誤り、金銀を持つて唯一の富とし、只、金銭を得るを以て、國家の富を増益する唯一の方便とするものを生ぜり。これを主錢黨といふ。凡そ金銀は購求力、即交換力を有し居るを以て、富の一部分たるには相違なしと雖、本來煮て食ふべからず、織りて著るを得ず、只、能く他品と換易するを得るのみなれば、換易の器具、即貨幣を製するには便なれども、固より、

これを以て、唯一無雙の富となすべきにあらざるなり。

○宿題

遊學先より故郷の母に

左の作例を見て文語體に作れ。

作例

田舎の祖母に

今朝は風はげしう候て、北に向きたるは、窓さへあけがたきやうに御座候。都の中さへ、かゝる寒さなるを、まして山おろしいかばかりかと、父

母ともぐ お案じ申し上げ、日々御噂のみいたし居候。祖母様には、此の寒さに御障りもいらせられずや。歳暮に伯父様より御文たまはり候節、いよく御健かにて、伯母様さへ御及びなきほど、家内の御用お氣がるに遊ばさるゝよし承り、父母はじめ私どもまで、嬉しうく。此の春花の時は、兄事御地へお迎ひに参り、御さそひ申し候て、上野、墨田川の人の出御目にかくる事もかなふべしと、一同勇み立ち居候。今十日ほどにて寒は明け候へど、餘寒は猶まざるものと

か、御身御大切に、風引きたまはぬやう遊ばされ度く、たゞこれのみを願ひ居り候。をかしき形なれど、私こしらへし綿衣、小包便にて御送り申し候間、おめしの下に御重ね下され度く、母よりは例の羊羹さし上げ候。いづれも、二三日の中には着き申すべく候。當地にては、誰れもく變ることこれなく候。父はかねて薄々申し上げおきしお役がへ、新年早々御座候ひしまゝ、御喜び下されたく、これは御年始状さし出し候節申し上ぐべきを、つい失念したれば、其方よりと

の言ひつけに御座候。どなた様にもよろしく
と申し納め候。(樋口一葉)

應用文題

- 一 久しく逢はざる人に
- 二 田舎より都の友に
- 三 遠き妹に送る品物にそへて
- 四 温泉場なる父の許に

第四課 敬語

敬語は書翰文に於ても、記事叙事の文に於ても、又口語體にも、文語體にも用ひて、先方を尊敬し、自己を謙遜する意をあ

らはすものにして、其の種類用法、頗多し。

名詞には、上、又は下に添へて敬意をあらはす。

玉座 御前 天覽 拜見 貴地 尊堂 芳翰

天皇陛下 將軍閣下 父様 母上 姉君

又、大御代、高御座、御父上様等の如く敬語を重ねれば、一層尊敬の意を深くするなり。

代名詞は、そのまゝにて敬語となる。

至尊 聖上 上様 九重 先生 貴下 君 あなた

又、小生、私、手前、わらはなど自分を卑下するによりて、先方を尊敬する意をあらはすあり。

動詞は、そのまゝにて敬語となれるものと、他語に添へてあらはすものとあり。

のたまふ。おはす。しろしめす。おほしめす。
書き給ふ。御出遊ばす。御覽なさる。召します。

又、自分の動作を卑下して敬意となるあり。

教へ奉る。拜見仕る。御伺申す。讀み候ふ。

助動詞の敬語となるは、

父の常に誠めらるゝは。東京まで行かれたさうだ。
先生の示さるゝ通り。母のいはれるには。
の如し。而して、動詞助動詞の敬語も、これを重ねれば敬
意一層深し。

琴をよく弾かせ給ふ。御位に即かしめらる。
かくれさせおはします。今直に参られます。

練習

左の文に敬語を施せ。又敬語に改むべき語はこれを直せ。

明治二十七八年の戦役正に終りて、臺灣の地わが
有に歸したれど、兇賊猶その地に據りて、險を恃み
て王師に抗せんとす。近衛師團長北白川宮兵に
將としてこれを討伐す。五月三十日、臺灣の東北
岸なる洩底に上陸す。このあたりは、人里遠き磯
邊なれば、立ち休らふべき軒端もなく、やう／＼砂
の上に幕を張り、いと怪しげなる椅子一脚を出し
て席とす。をりふし、樺山大將來たり、この有様を
見て、あなかしこ。こゝは皇族の始めて足を新領

土につけし處なれば、後の世までも傳へなん」とて、
木を削りて筆太に、

近衛師團長陸軍中將大勳位能久親王殿下幕營
之地

と記して建てたり。

左の文を特に敬語に注意して口語體に改むべし。

かゝりし程に、この頃よりは、わが父の、人に贈り給
ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の
秋、また、課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、
十一月に至りて、十日の内に、淨寫して參らすべし。」

と命ぜられ、命ぜられし如くに、事を終へつれば、冊
になして、戸部に見せ參らするに、褒め給ふこと大
方ならざりき。十三歳の時よりは、戸部の人と贈
答し給ふほどの文ども、大方はわれに命ぜられき。

第五課 書翰文

誘引文

散歩、旅行、見物に人を誘ふなど、すべて、誘引に關する文は、其
の時節々々に應じたる野外の景色、遊ばんとする土地の勝
景、見物せんとする事柄の興味などを、簡單に面白く書きて、

如何にも先方に遊意の起るやうにすべし。さもなく、ただそこへ行き給はずやとばかりの書きぶりにては、先方のかねて望みたる事と一致するの外は、大抵同意を得がたきものなり。

又、誘引に似たるものに勧誘の文あり。これは、遊ぶことにあらずして、入會、入社、其他事業に加入するを勧むる文なり。かゝる文には、其の事の趣意、事情等を明に説き、熱心に眞心を以て勧誘の理由を述べ、先方を感じせしめざるべからず。されど、其の事柄を誇大にいひ、妄に修飾を加へ、又は承諾を得んがために、殊更に尊敬するが如き語氣あるなどは宜しからず。

誘引、勧誘に對する返書にして、若し謝絶する場合には、詞和

らかに、其の理由をよく述べて、假りにも先方の感情を害ふ詞遣ひあるべからず。

作例

博物館見物に誘ふ

春もおひく、其の色を見せ申し候折から、かねて御約束の、帝室博物館見物の事おもひ立ち、昨日その掛員の人に問合せ申候ひしに、丁度、此頃珍しき品ども陳列せられたるよしに候。就ては、明後日は休日、に當り候へば、朝より出かけ申したく、あなた様の御都合伺ひ上げ候。尤、隅から隅まで見るわけにはまゐらず、只、半日の御暇

候はゞ御供出來候事と存じ候。書物の上のみにては、分りかね候物も、百聞は一見にしかずとか申し候如く、かしこに至り、實物に當り候て、いつも氷解することに候へば、この度の珍品にいても、必、幾多の發明ある事と存じ候。又、時間の餘りも候はゞ、盆栽の展覽會も、この程より開かれ居り候とか承り候へば、ついでに見めぐり候はんも面白かるべく候。若、御都合かなひ候はゞ、誠に嬉しく、順路なれば御宅へ參り、御誘ひ申すべく候。かしこ。
(高等女子讀本略改)

文題

- 一 學藝品展覽會見物に誘ふ
- 二 運動會見物に誘ふ
- 三 慈善音樂會に誘ふ
- 四 名所見物に誘ふ
- 五 花見誘引
- 六 散步誘引

K230.8

應用女子作文書卷二終

明治四十四年一月廿八日印刷
明治四十四年二月二日發行

定價	
卷一	金貳拾五錢
卷二	金貳拾五錢
卷三	金貳拾五錢
卷四	金參拾五錢

編者 三松堂編輯所

發行者 東京市京橋區南鍛冶町一番地 松邑孫吉

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 青木弘

印刷所 株式會社 秀英舍工場



(應用于女子作文書)

發兌元

東京市京橋區南鍛冶町
振替口座七九三四番

松邑三松堂

◎ 書良の讀必君諸生學校學女等高 ◎

前東京高等師範學校教授 小山左文二先生著
新 國語漢文辭林

全一冊

特價壹圓五拾錢
小包稅拾貳錢

重野文學博士 小杉文博士序
奈良女子高等師範學校教授 須藤求馬先生著
日 本 女 史

全一冊

定價壹圓貳拾錢
郵稅拾四錢

女子高等師範學校教授 黒田定治先生校閱
廣島高等師範學校教授 長谷川乙彦先生著
新 女 子 用 教 育 學

全一冊

定價五拾五錢
郵稅八錢

東京高等師範學校教授 吉田彌平先生著
東京高等師範學校教授 小山左文二先生著
三 國 文 典 教 科 書

全四冊

定價拾壹錢圓

東京高等師範學校教授 吉田彌平先生著
東京高等師範學校教授 小山左文二先生著
假 名 遣 教 科 書

全一冊

定價貳拾錢
郵稅四錢

★ 東京 京 橋 松 三 邑 堂 振 七 九 三 口 座 ★

◎ 書良の讀必君諸生學校學女等高 ◎

東京美術學校教授 福井江亭先生題書
伊藤龍涯先生編書
寫 生 の 仕 方

全一冊

定價卅五錢
郵稅四錢

前東京高等師範學校教授 小山左文二先生著
東京府第三高等女學校教授 西脇吳石先生著
高 等 女 新 撰 習 字 帖

全四冊

定價八拾錢
郵稅八錢

前東京高等師範學校教授 小山左文二先生著
東京府第三高等女學校教授 西脇吳石先生著
補 習 女 子 習 字 帖

全一冊

定價廿五錢
郵稅四錢

東京府青山師範學校教授 西脇吳石先生編書
東京府第三高等女學校教授
三 體 千 字 文

全一冊

定價四拾五錢
郵稅六錢

前東京高等師範學校教授 小山左文二先生著
東京府第三高等女學校教授 西脇吳石先生著
習 字 書 翰 文 範

全一冊

定價三拾錢
郵稅四錢

★ 東京 京 橋 松 三 邑 堂 振 七 九 三 口 座 ★

233
461

◎ 書 良 の 讀 必 君 諸 生 學 校 學 女 等 高 ◎

前東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
戊 申 聖 諭 讀 本 全二冊 定價貳拾五錢 郵稅六錢

前東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
東京府青山師範學校教諭 西脇吳石先生著
女子書 翰 文 讀 本 全一冊 定價貳拾五錢 郵稅六錢

大阪清水谷高等女學校校長 大村忠三郎先生著
實 用 料 理 教 本 全一冊 定價五拾錢 郵稅六錢

佐伯有磯先生標註
三木五百枝先生標註
校正神 皇 正 統 記 全一冊 定價卅五錢 郵稅六錢

博物研究所編纂
野 外 植 物 の 觀 察 全一冊 特價拾貳錢 郵稅四錢

★ 東 京 橋 本 三 松 堂 振 七 替 九 口 三 庫 四 ★

